形容詞の語義・用法の通時的変遷を探るためのデータベースの構築

山崎誠（国立国語研究所）、前川武（大阪国際大学短期大学部）
村山実和子（日本女子大学）、村田菜穂子（大阪国際大学）

要旨：
本発表は、日本語の形容詞の語義・用法の通時的変遷をマクロな視点から観察するために、国立国語研究所が作成した『日本語歴史コーパス』（CHJ）を利用し、奈良・平安・鎌倉・室町・江戸・明治・大正・昭和の各時代における実態を調査し、そこから語義・用法がどのように移り変わっているのかを明らかにするものである。調査する対象の形容詞は、「深い」「憂い」「恥ずかしい」「高い」「安い」「難い」「痛い」「悲しい」「良い」「悪しい」の 10 語で、これらは上記の各時代に一定数以上の用例が認められるものから選定している。
語義は、『日本国語大辞典』の語義分類に基き、用法は小田勝（2015）『古典文法総覧』等に基づき、活用形と連体用法、終止用法、連体法、中止法などとの組み合わせで、28 種類に分類した。語義の分布が変化した例として「高い」「恥ずかしい」「安い」、用法の分布が変化した例として「恥ずかしい」「安い」が挙げられる。また、語義と用法とが関連しているものも見られた。

キーワード：形容詞、語義・用法の変遷、「日本語歴史コーパス」

１　はじめに

筆者らは、語彙史研究を目的として、主に語彙索引を使用し、中古・中世の形容詞・形容動詞の量的な研究を行ってきた（村田菜穂子 2005、村田菜穂子・前川武 2019、村山実和子 2021）。ただし、データが索引であることから、語義や用法など文脈に基づく分析は非常に時間がかかるために実現できていなかった。しかし、『日本語歴史コーパス』（Corpus of Historical Japanese、以下 CHJ と略す）（国立国語研究所 2022）の利用により、語義や用法による分析が比較的容易に行えるようになった。そこで、筆者らは、最終的には CHJ を元にした、形容詞の通時的語義・用法データベースシステムを構築・公開することによって日本語学研究、特に、語彙研究および語彙史研究の分野に有益な資料を提供することを計画した。

本研究では、通時的語義・用法データベースを作成するにあたって、試行的に行った語義分類・用法分類の結果を報告するものである。

２　先行研究

形容詞の語義変化についての数量的な研究として、池上尚（2010）が挙げられる。この研究は、嗅覚を表す形容詞「カグハシ」「カウバシ」「カンバシ」の意味的変遷と交替を数量的に分析したものである。また、安本真弓（2018，2020）は、古典語の感情形容詞の意味分類を見直したものである。形容詞の用法については、土岐留美江（2017）が平安文学作品の会話文における動詞と形容詞の用法（連体法、準体法、終止法）について数量的な分析を行っている。現代語においては、橋本美奈子・青山文啓（1992）、宮島達夫（1992）がある。これらは、現代語の形容詞を対象に 3 つの用法（終止、連体、連用）を量的に分析したもので

ある。また、語義と用法の関係では、山崎誠（2011）がある。これは、現代語のいくつかの動詞および形容詞の語義と活用形の関係を分析し、特徴的な関係を持つ例を紹介したものである。語義を量的に扱った文献では、比較的少数の語を扱っているものが多い。また、これまでの本研究の成果は山崎誠ほか（2021、2022、2023）で報告している。

３　データと方法

3.1　データ

コーパス検索ツール「中納言」を利用して、CHJ から品詞が形容詞であるものを抜き出した。CHJ 全体の形容詞の量的情報を表 1 に示す。なお、表 1 と表 2 の数字は、CHJ のデータバージョンが 2021.03 のものである。

表１　CHJ の形容詞

単位	延べ語数	異なり語数
短単位	316814	1330
長単位	72470	1451

長単位の語数が短単位に比べてあまり多くないのは、短単位のデータが「奈良」から「昭和」までの全時代に渡って収録されているのに対して、長単位のデータは「江戸」「明治」「大正」「昭和」のデータがまだ中納言に実装されていないためである。

今回の試行的作業にあたって、全形容詞から以下の2つの条件を満たすものを抜き出した。

（1）現代まで使用されている形容詞
（2）複合語を作る力の強い一次形容詞

具体的には、条件（1）については、「奈良」「平安」「鎌倉」「室町」「江戸」「明治」「大正」のいずれの時代においても1例以上出現しているもの、条件（2）については、その形容詞が構成する複合語の数が異なりで5以上あるものとした。この条件を満たす語は16語であった。表2にその全体を示す。表2の「複合語数」は、短単位を後部要素に持つ長単位の異なり数である。

表２　抽出した形容詞とその時代別用例数（短単位）

語彙素読み(語彙素)	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正	昭和	合計	複合語数
カタイ（難い）	10	218	62	7	12	827	85	0	1221	238
ナイ（無い）	490	5124	4128	1590	5188	42762	25441	1187	85910	101
ヤスイ（易い）	4	45	38	76	21	151	16	0	351	34
ヨイ（良い）	90	740	429	904	2485	7036	6189	762	18635	28
フカイ（深い）	15	682	511	105	270	2530	1408	147	5668	17
タカイ（高い）	61	264	329	45	162	2483	1341	357	5042	12
クルシイ（苦しい）	59	550	101	118	57	369	298	22	1574	11
チカイ（近い）	41	589	340	55	121	1234	662	77	3119	11
トオイ（遠い）	138	246	186	30	67	1304	494	178	2643	9
アシイ（悪しい）	26	294	255	47	63	359	78	2	1124	8

ウイ（憂い）	8	621	195	12	99	91	8	1	1035	8
イタイ（痛い）	37	76	32	41	72	378	137	39	812	6
カナシイ（悲しい）	93	792	452	81	288	511	290	34	2541	6
ヤスイ（安い）	33	127	80	16	55	336	239	12	898	6
ナガイ（長い）	109	270	279	49	177	2269	1550	281	4984	5
ハズカシイ（恥ずかしい）	6	415	50	52	174	260	144	9	1110	5
クサイ（臭い）		5	21	2	8	70	62	0	168	14
コワイ（強い）		12	5	10	6	2	2	0	37	5
サワガシイ（騒がしい）		93	15	2	17	51	28	10	216	5
ムズカシイ（難しい）		132	65	26	86	438	255	34	1036	5

この中から「深い」「憂い」「恥ずかしい」「高い」「安い」「難い」「痛い」「悲しい」「良い」「悪しい」の 10 語を取り上げた。これらの形容詞は、属性形容詞（高い、深い、安い、難い、良し、悪しい）、感情形容詞（憂い、恥ずかしい、痛い、悲しい）に分けられ、ある程度の意味的な均衡を考慮した結果である。2023 年 11 月の時点では、上記 10 語のうち、平安時代、鎌倉時代、室町時代の用例について語義分類及び用法分類が調査できているのは、「深い」「憂い」「恥ずかしい」「高い」「安い」「良い」「悪しい」の 7 語である。作業対象は全用例ではなく、各語のそれぞれの時代においてランダムに抽出した 100 例とした。100 例に満たない場合は全例を調査した。なお、CHJ の 2022.3 のバージョンで鎌倉時代の作品が追加されている。今回の語義・用法分類はその追加分も含めた中からランダムに抜き出したものである。

3.2　語義分類

語義分類は原則として『日本国語大辞典』（ジャパンナレッジ、2022 年 7 月～8 月アクセス）の分類に従うこととした。『日本国語大辞典』にないものは、作業者が語義を付与した。語義の決定に当たっては小学館『日本古典文学全集』（ジャパンナレッジ）記載の現代語訳を参考にした。この語義分類については、すべて手作業で行っている。形容詞全体を対象とするには膨大な数の用例を処理しなければならず、当然、自然言語処理による自動処理が望ましいが、現時点でのプロジェクトメンバー内に専門家がいないことや、自動化のための学習用データがまだ不足していると思われることから、まずは試行的に対象を限定して手作業にて行うこととした。なお、CHJ の「悪しい」に対応するのは『日本国語大辞典』では「悪し」であるため、「悪し」の項目の語義を参照した。

3.3　用法分類

用法については、小田勝（2015）、土岐留美江（2017）を参考にして詳細な分類基準を策定した。その策定にあたっては、当該形容詞の前後の語の品詞・活用形の情報を参照することで、基準を明確にすることを目指した。なお、前後の語の形態論情報については,「中納言」の「インラインタグを使用」という機能を利用し、当該形容詞の前後に現れる語の品詞（中分類）・活用形（小分類）の情報を同時に抽出している。分類基準を付録に示した。

４　結果

本稿では、平安、鎌倉、室町の 3 つの時代を対象に、この間の語義の分布、用法の分布の変遷を報告する。2023 年 11 月時点で平安から室町までのデータ整っているものの中から時代による変化が見られたものを以下に挙げる。以下の各表の数字は、各時代における語義や

用法の割合であり、用例の実数ではない。

4.1. 語義の変遷

「深い」: 全体的に大きな変化は見られないが、平安から鎌倉に掛けて「上下方向の隔たり」の意味が増加、室町でもその傾向を保っている。一方、「感情」を表す意味は平安から鎌倉に掛けて減少している。(3) は「上下方向の隔たり」の例、(4) は「感情」を表す例である。なお用例のあとに付けた（　）内の情報はサンプル ID と開始位置でこの情報を使って用例にピンポイントでアクセスすることができる。

(3) ［牛車の車輪が落ち込んだのが］いと深き堀にて、とみにえ引きあげで、とかくもて騒ぐほどに、輪少し折れぬ。(20-落窪 0986_00002,190810)

(4) 小野宮殿の御女、弘徽殿の女御とてさぶらはせ給ひけるが、かぎりなく御志深かりけるに、［女御が］おくれさせ給ひて、［帝の］御歎き浅からず。(30-十訓 1252_06010,3570)

表 3　「深い」の語義の変遷

語義	平安	鎌倉	室町
(1)(イ)上下方向の隔たり	6.0	13.0	15.0
(1)(ハ)深遠な	1.0	1.0	0.0
(1)(ロ)奥行きがある	7.0	17.0	7.0
(2)(イ)感情	58.0	39.0	38.0
(2)(ロ)情趣	0.0	3.0	0.0
(3)(イ)縁・人間関係	14.0	9.0	11.0
(3)(ニ)行為動作	0.0	1.0	4.0
(3)(ハ)学問・経験	0.0	4.0	2.0
(3)(ホ)かかわり合い方	0.0	0.0	1.0
(3)(ロ)罪・障害	0.0	0.0	8.0
(4)(イ)色	1.0	2.0	0.0
(4)(ニ)草木・毛	0.0	2.0	5.0
(4)(ハ)霞・霧	5.0	4.0	3.0
(5)(イ)老齢	2.0	0.0	0.0
(5)(ハ)夜遅く	2.0	2.0	3.0
(5)(ロ)たけなわ	0.0	2.0	0.0
X その他	4.0	1.0	3.0
計	100.0	100.0	100.0

「恥ずかしい」: 平安では「気詰まり、気後れ、決まりが悪い」の 3 つの意味が見られたが、鎌倉では「決まりが悪い」という現在の意味と同じになり、室町では全部の例が「決まりが悪い」になった。(5) は「気詰まり」の例、(6) は「気後れ」の例、(7) は「決まりが悪い」の例である。

(5) かかるままに、「愛敬なの雨や」と腹立てば、君、恥づかしけれど、「などかくは言ふぞ」とのたまへば、「なほよろしう降れかし。(20-落窪 0986_00001, 151480)

(6) ほどよりはいみじうされおとなびたまへり。宮も、「かく恥づかしき人参りたまふを、御心づかひして見えたてまつらせたまへ」と聞こえたまひけり。(20-源氏 1010_00017,15830)

(7)「国がゆかしひ、いていわふずるは、見ぐるしひ所を見せてはづかしうこそあれ、さりながらかんにんをするならば、くわつとふちをせう、芸能はなひ（40-虎明 1642_02006,35670）

表 4　「恥ずかしい」の語義の変遷

語義	平安	鎌倉	室町
(1)決まりが悪い	20.0	89.6	100.0
(2)気詰まり	53.0	0.0	0.0
(3)気おくれ	26.0	9.0	0.0
X その他	1.0	1.5	0.0
計	100.0	100.0	100.0

「高い」：平安・鎌倉では、「丈が長い」「身分や地位が高い」という意味が見られたが、室町では減少した。また、「価格が高い」という意味は平安・鎌倉ではほとんど見られなかったが、室町で増加した。(8) は「丈が高い」の例、(9) は「身分や地位が高い」の例、(10) は「価格が高い」の例である。

(8) 白くなどもなく、泥のやうにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで、高く生ひ茂りて、(20-更級 1059_00001,15000)
(9) まだいと小さきほどにて、いとらうたげなり。四人ながらいづれとなく、高き家の子にて、容貌をかしげにかしづき出でたる、思ひなしもやむごとなし。（20-源氏 1010_00035,462400）
(10) 誠に田舎の人とみえた、その両がんの事ではおりなひ、やすひ物をたかふうり、そでなひ物を、そじやといふてうるを、都のことばに（40-虎明 1642_01013,10390）

表 5　「高い」の語義の変遷

語義	平安	鎌倉	室町
〔一〕(1)上の方にある	21.0	22.0	20.0
〔一〕(2)盛り上がる・積もる	25.0	24.0	40.0
〔一〕(3)丈が長い	11.0	17.0	4.4
〔一〕(4)外に突き出る	1.0	1.0	4.4
〔二〕(1)声・音が大きい	10.0	14.0	13.3
〔二〕(2)高音	2.0	0.0	0.0
〔二〕(3)知れ渡る	4.0	4.0	0.0
〔三〕(1)身分・地位	22.0	11.0	4.4
〔三〕(2)容姿・品位	0.0	1.0	0.0
〔三〕(3)思念・理想	0.0	0.0	2.2
〔四〕(1)時間経過	1.0	3.0	0.0
〔四〕(2)高価	0.0	3.0	11.1
〔四〕(3)数値・程度	3.0	0.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

「安い」：平安ではほとんどが「安心・平穏」の意味であったが、鎌倉では「容易」の意味が、室町では「安価」の意味が見られた。(11) は、「安心・平穏」の意味、(12)（10 の再

掲）は「安価」の意味である。

（11）御送りに、上達部などあまた参りたまふ。かの家司望みたまひし大納言も、やすからず思ひながらさぶらひたまふ。御車寄せたる所に、院渡りたまひて、おろしたてまつり（20-源氏 1010_00034,168890）
（12）（＝10）誠に田舎の人とみえた、その両がんの事ではおりなひ、やすひ物をたかふうり、そでなひ物を、そじやといふてうるを、都のことばに（40-虎明 1642_01013,10390）

表 6　「安い」の語義の変遷

語義	平安	鎌倉	室町
(1)安心・平穏	93.0	73.0	75.0
(2)容易	0.0	25.0	0.0
(3)自由・気楽	2.0	0.0	0.0
(4)安価	0.0	0.0	25.0
X その他	5.0	2.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

「悪しい」：平安から鎌倉に掛けて「機嫌が悪い」「下手」という意味が減少した。「機嫌が悪い」のほうが室町で下げ止まった感があるが、「下手」は室町では出現していない。一方、平安・鎌倉まで 2 割台だった「けしからぬ」の意味が室町になって 2 倍以上になった。(13)は「機嫌が悪い」の意味、(14) は「下手」の意味、(15) はけしからぬ」の意味である。

（13）天人いふ、「壺なる御薬たてまつれ。穢き所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」とて、持て寄りたれば、いささかなめたまひて、(20-竹取 0900_00001, 188380)
（14）「あなおそろし。まかり逃ぐ」と言ひて出でぬるを、「いみじう真名も仮名もあしう書くを、人笑ひなどする、かくしてなむある」と言ふもをかし。　作物所（20-枕草 1001_00099, 5850）
（15）御後悔でこそ御座らうずれと，申したれば：清盛重盛に仲違うては悪しからうずと思われたか，法皇を迎い奉らうずる事をも早思い止まり，（40-天平 1592_01006, 36960）

表 7　「悪しい」の語義の変遷

語義	平安	鎌倉	室町
(1)邪悪・不正	23.0	38.0	27.7
(2)けしからぬ	20.0	26.0	57.4
(3)縁起が悪い	4.0	5.0	6.4
(4)機嫌が悪い	28.0	9.0	8.5
(5)荒れ模様	1.0	1.0	0.0
(6)醜悪	1.0	5.0	0.0
(7)貧しい・卑しい	3.0	0.0	0.0
(8)下手	12.0	7.0	0.0
(9)粗末	7.0	8.0	0.0
X その他	1.0	1.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

4.2　用法の変遷

「深い」：連体用法と連用修飾（副詞法）の 2 つで大多数を占めるが、鎌倉では連用形の助動詞接続と助詞接続が増えている。室町では減少しているので、作品の個性によるものかもしれない。(16) は連体用法、(17) は連用修飾（副詞法）、(18) は連用形の助動詞接続、(19) は連用形の助詞接続の例である。

（16）思はずなるさまに散りぼひはべらむが悲しさに、尼になして深き山にやし据ゑて、さる方に世の中を思ひ絶えてはべらましなど（20-源氏 1010_00050, 115740）
（17）若君は、春宮に参りたまひて、男宮生まれたまへるよしをなん、深くよろこび申しはべる。（20-源氏 1010_00034, 351700）
（18）憂きは世のならひながら、ことさらなる御心ざしも、深かりつる御嘆きも、惜しけれ」などありしも、なかなか何と申すべき言の葉もなければ（30-とは 1306_03007, 2510）
（19）「此る賤の者の娘也と云ども、前世の契深くこそは有らめ」と思給へて（30-今昔 1100_22007, 30520）

表 8　「深い」の用法の変遷

用法	平安	鎌倉	室町
A-a. 連体用法	44.0	38.0	44.0
A-d. 準体用法	3.0	0.0	1.0
A-e. 助動詞接続	4.0	0.0	0.0
A-f. 助詞接続	0.0	0.0	1.0
B-a. 終止形終止法	2.0	4.0	5.0
C-a. 連用修飾（副詞法）	30.0	28.0	29.0
C-b. 連用形中止法	2.0	3.0	4.0
C-c. 助動詞接続	2.0	11.0	6.0
C-d. 助詞接続	6.0	13.0	1.0
D-a. 助動詞接続	0.0	0.0	1.0
E-b. 助詞接続	2.0	0.0	1.0
F-e. 名詞生成	5.0	2.0	2.0
F-g. ミ語法	0.0	0.0	2.0
F-h. 形容動詞生成	0.0	0.0	2.0
H. その他	0.0	0.0	1.0
不明（破損あり）	0.0	1.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

「恥ずかしい」：平安では、形容動詞を派生する用法が見られたが、鎌倉で減少し、室町では見られなくなった。また、室町で語幹を感動詞的に使う用法が増えている。この形容詞は、形容詞の三大用法である、連体用法、連用修飾（副詞法）、終止形終止法以外の用法も一定数見られ、用法の多様性が他の形容詞に比べて多くなっている。(20) は、形容動詞を派生する例、(21) は語幹を感動詞的に使う例である。

（20）枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわろから（20-紫式 1010_00001, 7690）

（21）やれ「心えまらした「わきの座へなをる「先その小袖をとらしめ「ああはづかしやいやでござる「いつまでさやうにしておじやらふぞ、おとりやれ「いや／＼（40-虎明 1642_05004, 6690）

表 9　「恥ずかしい」の用法の変遷

用法	平安	鎌倉	室町
A-a. 連体用法	8.0	3.0	12.2
A-c. 終止法（係り結び）	0.0	0.0	2.0
A-d. 準体用法	2.0	0.0	0.0
A-e. 助動詞接続	3.0	0.0	0.0
A-f. 助詞接続	0.0	1.5	4.1
B-a. 終止形終止法	16.0	19.7	12.2
C-a. 連用修飾（副詞法）	18.0	37.9	26.5
C-b. 連用形中止法	3.0	0.0	0.0
C-c. 助動詞接続	1.0	6.1	2.0
C-d. 助詞接続	13.0	10.6	10.2
D-a. 助動詞接続	0.0	4.5	2.0
E-a. 終止法（係り結び）	3.0	6.1	0.0
E-b. 助詞接続	9.0	0.0	6.1
F-c. 感動	1.0	0.0	16.3
F-d. 名詞	0.0	0.0	2.0
F-e. 名詞生成	1.0	4.5	2.0
F-f. 連体法	0.0	0.0	2.0
F-g. 形容動詞生成	20.0	4.5	0.0
F-h. 助詞接続	1.0	1.5	0.0
F-x. その他	1.0	0.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

「高い」：連体用法と連用用法がほとんどを占めるが、室町になり、終止法が若干増加したように見える。また、平安から鎌倉に掛けて、ミ語法が減少したが、含まれる和歌の数が少なくなった事と関連があるかもしれない。（22）は終止形終止法の例、（23）はミ語法の例である。

（22）まして馬は心あるものにあらず。この大路はいみじう石高し。馬は口を張りたれば、歩まんと思ふだに歩まれず。（30-宇治 1220_13002, 4340）
（23）滝つせの中にもよどはありてふをなど我が恋のふちせともなき山たかみした行水のしたにのみ流てこひん恋はしぬとも思出るときはの（20W 古今 0905_11012, 8020）

表 10　「高い」の用法の変遷

用法	平安	鎌倉	室町
A-a. 連体用法	27.0	23.0	33.3
A-d. 準体用法	6.0	4.0	8.9
A-e. 助動詞接続	1.0	0.0	0.0
A-f. 助詞接続	1.0	0.0	0.0

B-a. 終止形終止法	3.0	4.0	8.9
C-a. 連用修飾（副詞法）	39.0	56.0	33.3
C-b. 連用形中止法	2.0	0.0	4.4
C-c. 助動詞接続	0.0	1.0	0.0
C-d. 助詞接続	4.0	2.0	6.7
D-a. 助動詞接続	1.0	1.0	0.0
E-a. 終止法（係り結び）	0.0	0.0	2.2
E-b. 助詞接続	4.0	3.0	0.0
F-a. 名詞修飾	1.0	3.0	0.0
F-d. 名詞	2.0	2.0	0.0
F-e. 名詞生成	0.0	0.0	2.2
F-g. ミ語法	9.0	1.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

「安い」：平安では未然形＋否定の助動詞（＝「安からず」）の例が 8 割を占めたが、鎌倉・室町では 5 割に減少し、それに代わって、連体用法が 2～3 割程度を占めた。(24) は未然形の否定の助動詞接続の例、(25) は連体用法の例である。

(24) なき玉と思ほしかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸の隙なくやすからずものを思ほす。(20-源氏 1010_00007, 63680)
(25) と云へば、教円、「詣でむ事は糸安き事也。其の日の未だ朝、三津の辺に迎への船を遣せ給へ (30-今昔 1100_28007, 3270)

表 11　「安い」の用法の変遷

用法	平安	鎌倉	室町
A-a. 連体用法	3.0	24.0	31.3
B-a. 終止形終止法	1.0	3.0	0.0
C-a. 連用修飾（副詞法）	1.0	15.0	6.3
C-b. 連用形中止法	0.0	2.0	6.3
C-c. 助動詞接続	0.0	3.0	0.0
C-d. 助詞接続	1.0	4.0	0.0
D-a. 助動詞接続	83.0	46.0	50.0
D-b. 助詞接続	2.0	1.0	0.0
E-a. 終止法（係り結び）	1.0	0.0	0.0
E-b. 助詞接続	0.0	2.0	0.0
F-a. 名詞修飾	0.0	0.0	6.3
F-g. ミ語法	1.0	0.0	0.0
F-g. 形容動詞生成	7.0	0.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

「悪しい」：平安から鎌倉に掛けて連体用法が 3 倍以上になり、その傾向は室町でも同じである。一方、平安から鎌倉に掛けて準体用法、終止形終止法が減少した。また、平安から室町に掛けて、連用形の助詞接続（C-d）が減り、未然形の助動詞接続（D-a）が増えた。

（26）公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞えしは、極て腹あしき人なりけり。坊の傍に、大きなる榎の木のありければ、人、「(30-徒然 1336_01045, 260)
（27）あけさせたまひて、いと忍びて出でたまひぬ。つつやみにて、わぶわぶ、道のあしきをよろぼひおはするほどに、前おひて、あまた火ともさせて、小路ぎりに辻に（20-落窪 0986_00001, 153480）
（28）げにてかかりてゐたるを、＜あはれ＞とや見たまひけむ、身なりいとあし。＜あはれ＞とは見たてまつれど、「まづやんごとなき子どものことをするほど（20-落窪 0986_00001, 32440）
（29）文字あまり七文字。人みな、えあらで、笑ふやうなり。歌主、いと気色悪しくて、怨んず。まねべどもえまねばず。書けりとも、え読み据ゑがたかるべし。(20-土佐 0934_00001, 53770)
（30）その上は力に及ばぬと，言われたに因って，この事悪しからうずと思うたか：二人の者共大納言の左右の手を取って（40-天平 1592_01003, 45220）

表 12　「悪しい」の用法の変遷

用法	平安	鎌倉	室町
A-a. 連体用法	11.0	35.0	38.3
A-d. 準体用法	9.0	2.0	4.3
A-e. 助動詞接続	5.0	3.0	4.3
A-f. 助詞接続	0.0	1.0	2.1
B-a. 終止形終止法	15.0	7.0	4.3
B-b. 終止形繰返し法	1.0	0.0	0.0
C-a. 連用修飾（副詞法）	17.0	14.0	17.0
C-b. 連用形中止法	3.0	1.0	0.0
C-c. 助動詞接続	7.0	18.0	0.0
C-d. 助詞接続	15.0	9.0	4.3
D-a. 助動詞接続	3.0	4.0	23.4
E-b. 助詞接続	7.0	2.0	2.1
F-a. 名詞修飾	0.0	4.0	0.0
F-b. 動詞修飾	1.0	0.0	0.0
F-e. 名詞生成	3.0	0.0	0.0
F-h. 形容動詞生成	3.0	0.0	0.0
計	100.0	100.0	100.0

4.3　語義と用法との関係

「安い」の例では、未然形＋否定の助動詞の形は、平安で 8 割強、鎌倉・室町では約 6 割が「安心・平穏」の意味であった。一方、連体用法は過半数が「容易」の意味であった。このように、用法と意味が関連しているものが見られた。

５　問題点と今後の課題

本研究の意義は、語義・用法の通時的な分布をコーパスを利用して具体的に量的に把握できるようにしたことである。また、時代別の語誌記述の詳細化や言語変化のモデル化に貢献することが期待できる。

現時点で把握している改善点としては、用法の付与基準が曖昧なことである。用法は連体・連用・終止などのほかに、後接の品詞による分類が混在しているため、その調整が必要であると考えている。また、作品のジャンルによる語義・用法の偏りがあるかもしれない。CHJ の平安時代の作品はほとんどが和文系文学作品、室町時代の作品は狂言とキリシタン資料である。ジャンルが異なれば語義・用法の分布が違ってくる可能性があるだろう。今後は、対象となる時代を増やすとともに、語義・用法の付与方法の吟味を行う予定である。

参考文献

池上尚（2010）嗅覚表現形容詞「カグハシ」「カウバシ」「カンバシ」―近世以降における意味・用法の分担過程，国文学研究，162，64-53.

小田勝（2015）『古典文法総覧』和泉書院.

国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス』バージョン 2022.3
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/

土岐留美江（2017）平安和文会話文における連体法、準体法、終止法の比較分析，愛知教育大学研究報告.人文・社会科学編，66，21-29.

橋本美奈子・青山文啓（1992）形容詞の三つの用法：終止，連体，連用，計量国語学，18(5)，201-214.

宮島達夫（1993）形容詞の語形と用法，計量国語学，19(2)，94-104.

村田菜穂子（2005）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院.

村田菜穂子・前川武（2019）「語構成から見た形容詞―中古から中世への変遷―」『国語語彙史の研究』38，139-162，和泉書院.

村山実和子（2021）「ワル（悪）＋形容詞」の消長―形容詞語形成の観点から―，『筑紫語学論叢Ⅲ―日本語の構造と変化―』179-198，風間書房.

安本真弓（2018）感情形容詞の意味分類―『日本古典対照分類語彙表』を基盤として―，国語学研究，57，147-133.

安本真弓（2020）奈良・平安・鎌倉時代の和文作品における感情形容詞の意味分類とシソーラス，国語学研究，59，525-509.

山崎誠（2011）多義語を構成する意味の使用傾向―品詞と活用形による違い―，言語処理学会第 17 回年次大会発表論文集，659-662.

山崎誠・村田菜穂子・前川武・村山実和子（2021）形容詞の通時的語義・用法データベースの作成，人文科学とコンピュータシンポジウム 2021 論文集，170-175.

山崎誠・村田菜穂子・前川武・村山実和子（2022）形容詞の通時的語義・用法データベースの構想と進捗状況，人文科学とコンピュータシンポジウム 2022 論文集，91-96.

山崎誠・村田菜穂子・前川武・村山実和子（2023）『日本語歴史コーパス』への形容詞の語義・用法情報の追加，言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集，766-771.

付録　活用形ごとの分類基準（山崎誠他 2023 を修正）

	用法	分類基準（機能・後続語）
A.連体形	a.連体用法	連体修飾語を形成する
	b.連体形終止法	そこで文を終止する
	c.終止法（係り結び）	係り助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」と呼応して文を終止する
	d.準体用法	連体形をそのまま名詞句として用いる
	e.助動詞に接続	なり・たり（断定），ごとし（比況）
	f.助詞に接続	が（逆接確定条件＜～けれど・～のに＞，単純な接続＜～と・～ところ＞） に・を（順接確定条件＜～から・～ので＞，逆接確定条件＜～けれど・～のに＞，単純な接続＜～と・～ところ＞） ものの・ものを・ものから・ものゆゑ（逆接確定条件＜～けれど・～のに＞）
B.終止形	a.終止形終止法	そこで文を終止する
	b.終止形名詞法	終止形自体がそのような状態のものの意を表す名詞として用いられる
	c.連体法	終止形が直接名詞に続く
	d.助動詞に接続	らむ・べし・らし・めり（推量），なり(伝聞)，まじ（打消推量）
	e.助詞に接続	とも（逆接仮定条件＜たとえ～ても＞）
C.連用形	a.連用修飾（副詞法）	後続の用言を修飾する
	b.連用形中止法	そこで文を終止せずに，いったん止めて，以下に文を続ける
	c.助動詞に接続	き・けり（過去），つ・ぬ・たり(完了)，けむ（推量），たし（希望）
	d.助詞に接続	て・して（単純な接続＜～て＞） つつ（動作の並行＜～ながら＞，反復・継続＜～しては・～し続けて＞） ながら（動作の並行＜～ながら＞，逆接確定条件＜～けれど・～のに＞）
D.未然形	a.助動詞に接続	る・らる（受身・自発・可能・尊敬），す・さす・しむ（使役・尊敬），む・むず・まし（推量），ず（打消），じ（打消推量），まほし（希望）
	b.助詞に接続	は（ば）（順接仮定条件＜もし～ならば＞，（順接確定条件（原因・理由＜～から・～ので＞，偶然条件＜～と・～ところ＞，恒常条件＜～といつも＞）
E.已然形	a.終止法（係り結び）	係り助詞「こそ」と呼応して文を終止する
	b.助詞に接続	は（ば）（順接仮定条件＜もし～ならば＞，（順接確定条件（原因・理由＜～から・～ので＞，偶然条件＜～と・～ところ＞，恒常条件＜～といつも＞）
F.語幹	a.名詞修飾	直接名詞を修飾する
	b.動詞修飾	直接動詞を修飾する
	c.感動	「あな＋語幹」，「あな＋語幹＋や」，単独で感動の意を表す
	d.名詞	語幹自体が名詞として用いられる
	e.名詞生成	接尾辞「さ」を伴って，その状態・程度を表す名詞を作る 接尾辞「み」を伴って，「その状態の所」の意を表す名詞を作る
	f.連体法	語幹がそのまま連体法に用いられる
	g.ミ語法	語幹に「み」を付けて，理由を表す
	h.形容動詞生成	接尾辞「～げ」を伴って，「様子や気配」という意味を付加した形容動詞を作る
	i.助詞に接続	に（逆接確定条件＜～けれど・～のに＞）
G.ク語法		「安けく」のように「けく」を付けて「～すること」を表す
H.その他		